

道徳的行為に関する体験的な学習の研究

～道徳性の諸様相と役割演技について～

林 修也

第1章 研究テーマ設定の理由

文部科学省では、平成28年12月の中央教育審議会答申を踏まえ、平成29年3月31日に学校教育法施行規則の一部改正と小学校学習指導要領の改訂を行った。

その中で、道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れることについては、質の高い多様な指導方法の中でも「役割演技などの体験的な学習を通して、実際の問題場面を実感を伴って理解することを通して、様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うことができる。問題場面を実際に体験してみること、また、それに対して自分ならどういう行動をとるかという問題解決のための役割演技を通して、道徳的価値を実現するための資質・能力を養うことができる。」¹と強調されている。

このように、道徳的行為に関する体験的な学習を道徳科の授業に取り入れることは、道徳的諸価値を理解したり、自分との関わりで多面的、多角的に考えたりするだけでなく、道徳的価値を実現するための資質・能力を養うためにも大変重要である。

そこで、本研究では、道徳科の授業における学習指導の多様な展開の一つである、即興的に演技する役割演技、動きや言葉を模倣して理解を深める動作化に着目し、道徳性の諸様相との関係について考察する。

第2章 学習指導要領に示されている劇化、動作化、役割演技の分析

昭和33年の特設道徳以降の劇化、役割演技、動作化について、道徳教育実施要綱・道徳指導書及び学習指導要領解説道徳編等から分析を進めた。

本章における最大の疑問としては、なぜ、昭和33年当時、劇化として指導書に提示されていたにも関わらず、昭和45年の指導書以降、その記載がなくなっていることである。

このことについて、第3節 小学校・中学校指導書 道徳編（小学校1969年 昭和44年、中学校1970年 昭和45年）の中で、1967年に文部省から発行されている『小学校道徳指導の諸問題』の劇化についての留意点や『中学校 道徳指導の諸問題』から考察

を加えているが、はっきりと劇化から役割演技とした根拠を指導書などから探ることはできなかった。しかし、江橋は、『役割演技』の中で、「現場において、この『劇化』の利用度は、読み物利用や、視聴覚教材の利用とは比べものにならぬくらい低いものであった。」²としている。

そして、その理由については、「脚本による指導は手間がかかり、時間を浪費するか、演劇に関心を持つ一部の教師が利用するもので、演出する力がなければ指導できないというものであった。また、『劇化』の主要なる位置を占めていた役割演技についても、その指導方法がわからないので利用できないということも言われていた。」³と説明している。

その上で、昭和 39 年に行われた東京都小学校道徳教育研究会の調査結果から、「現場では、劇化は扱いにくいものとして、利用されることが少なかった。」⁴ことを明らかにしている。

特設当時、道徳の時間において劇化を取り入れた指導方法は、刊行された脚本に従って演技する方法や名作を生徒が脚色し演技するなど、指導書には、その指導方法が詳細に記載されていた。しかし、劇化を取り入れた指導方法は、児童・生徒に高い演技力を求めなければならないことや小道具などの準備、劇化を実施するための事前練習に係る時間が必要になることなどからも、極めてハードルが高かったと考えられる。

『中学校 道徳指導の諸問題』劇化の問題点

「劇化にもいろいろな手段や様式があるが、おしなべて中学校の場合には、基礎訓練の段階でよほどのくふうと努力をしなければ効果的な活用はむずかしい。」⁵

また、昭和 39 年に行われた東京都小学校道徳教育研究会の調査結果【表 1】からもわかるように、劇化に関しては、第 1 学年においても 8%と低く、他の指導方法と比較してもその差は歴然である。第 5 学年に至っては 2%と極めて低い使用頻度であることがわかる。

これらのことから、昭和 44 年以降の道徳指導書に劇化の記載がなくなっていることについては、現場の先生方の声を反映した内容になったと考えられる。

その後、平成 20 年の学習指導要領解説道徳編まで、指導書等に劇化の記載はない。しかし、昭和 33 年の特設道徳以降、その年代により表現方法は変えてはいるものの、

道徳的行為に関する体験的な学習は、道徳の時間における指導方法の一つとして、今なお、劇化、役割演技、動作化の活用方法が学習指導要領解説道徳編に記されている。

これは、特設当時より 60 年以上、体験を生かした学習が示されていることから、効果的な指導方法の一つであることが変遷からも明らかである。役割演技は、昭和 33 年の特設道徳以来、一貫して指導書や学習指導要領に、即興的に演技させることが示されていることから、その有効性や効果、魅力が認められていると判断できる。

【表 1】 道徳の時間に用いられる指導方法 (単位は%)

学年 方法	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年	平 均
話し合い	24	26	27	28	27	26	26.3
説 話	14	12	14	14	13	14	13.5
読み物	13	19	20	24	27	28	21.8
視聴覚	25	22	20	18	19	18	20.3
劇 化	8	6	4	3	2	3	4.3
実践活動	13	11	11	9	8	7	9.8
その他	3	4	4	4	4	4	3.8

江橋『役割演技』より筆者がまとめたもの

第 3 章 役割演技とロール・プレイング

本章では、役割演技とロール・プレイングについて、社会学、心理学の両面から位置付けを確認するとともに、先行研究よりロール・プレイングについて検討した。

役割演技とロール・プレイングについて、その定義や先行研究を検討し、社会学辞典や心理学辞典、日本心理劇学会の会則においても、役割演技とロール・プレイングが定義されていることから、道徳科における「児童に特定の役割を与えて即興的に演技する役割演技」と捉えることもできると考える。

そこで、本論説では、役割演技とロール・プレイングについて、同義と捉え論じていくこととした。

第4章 役割演技に関わる先行研究

本章では、第1節において、日本にサイコドラマ（心理劇）を国内に広めたとされる外林の心理劇と自発性について先行研究から分析を進めた。

外林は、心理劇と即興劇の関係、監督や補助自我のみならず、観衆の理解力や準備の程度が大きく影響することについて、心理劇における自己の主張を展開している。

しかしながら、外林は、心理劇における監督や補助自我、観衆の重要性については言及しているものの道徳の時間における役割演技やロール・プレイングの活用と道徳性や道徳性の諸様相との関係についてまでは言及していない。

そこで、第2節以降は、アメリカの心理学者であるモレノのサイコドラマを起源として道徳の時間における役割演技の理論について展開している江橋・生田の先行研究を分析した。

始めに、江橋は、心理劇における自発性の理論を基に、役割演技において即興的に演技することについて、「即興性を強調することによって、児童の自発性は高められ、単なる反応的順応ではなく、自ら、その時、その場にあったふるまいを選択して、実践するようになるのである。」⁶と主張し、即興的に演技を行うことのできる役割演技は、子ども達が、常に新しい人間関係において対応を瞬時に行うため、自発性の育成につながるとしている。

そして、自発性については、「新しい事態、あるいは経験済みの事態に直面したときに、いち早く適切な行動ができるという性質を持ったものである。人から指示されたり、人の行動を模倣するのでなく、自らが自然発生的に応答することができるものが自発性といわれるものなのである。」⁷と説明している。

また、創造性については、「社会から容認されている考え方や慣習に対する同調性と自発性が高度に統合された場合に生まれてくる。」⁸と述べ、創造活動を積み重ねることを通して、自発性と創造性が発揮されることを主張している。

このように、江橋は、道徳の時間における役割演技と自発性・創造性の関係については明らかにしているが、道徳性の諸様相との関係については十分に説明がされているとは言いがたい。

そして、道徳性についても、「道徳性とは、主体的なものであって、なんら拘束も受けずに、その行為を、社会によって受け入れられている善悪に関する原理や、行為の最高の基準に合致させることのできる能力や傾向性を意味していると思われる。」⁹と定義

しているが、役割演技との関係性からというよりも、道徳性について広義にとらえ主張していると考えられる。

次に、生田は、役割演技について、「モレノのサイコドラマにその源流を発しているが、サイコドラマそのものではない。サイコドラマは、もともと精神療法であって、それをそのまま道徳の時間に持ち込むことは必ずしも正しくない、また、困難でもある。」¹⁰と説明しながらも、自発性と創造性の理論、そして役割理論から成りたっていることを述べ、「いま・ここで・新しくどうふるまうかを即興的に劇化し、対人関係の改善をめざしているのであるから、理論的にも技術的にも、ここでの役割演技と共通する面がきわめて多い。」¹¹と主張している。

そして、自発性については、「対人関係の発展する新しい状況に対処して、その時々適切なふるまいができることであり、その場にふさわしい役割がとれることを意味する。」¹²としている。

また、創造性については、「新しい事態に直面したとき、その場にふさわしい行動をとることは、過去の経験や学習をもとにして、新しいものを創造していくことである。」¹³としており、道徳指導実践から子どもたちが、劇を通して新しいものを創造していくことで、創造性が高められるとしている。

そのうえで、役割演技が道徳的知識・判断、道徳的心情、道徳的態度及び道徳的实践力にどのような効果をもたらすのかについても主張している。

まず、道徳的知識・判断については、道徳性について、「まず知ることが根本となる。」¹⁴ことを主張した上で、「道徳的知識は小学校の中学年にもなればおとなのそれに近いレベルにまで達するといわれる。低学年でさえも、社会生活を営むうえで必要な知識はほとんど知っているといってもよからう。」¹⁵とし、「この道徳的知識が生きてくるのは、それが道徳的判断と結びついたときである。」¹⁶と述べている。

そして、役割演技では、「およその場面と役割を決めておくだけで、子どもたちに即興的に演技させるのであるから、ただ観念的に考えたり話あったりする場面とちがう当面する問題をいろいろな立場から見直し、行動を通して解決策を追求するのである。」¹⁷と述べている。

次に、道徳的心情については、「役割演技を通して、自分を客観的にみつめようとする心、相手を許したり、相手の立場にたって考え、行動しようという心を培うことができるのである。」¹⁸としている。

また、道徳的態度については、道徳の時間に役割演技を通して実践しようとした道徳的行為を態度と捉え、「さまざまな感情を克服して、そうしなければじっとしておれないという心に裏打ちされて生まれた行動こそ価値ある道徳的行為といえるのである。」¹⁹としている。

最後に、道徳的实践力については、「役割演技は、対人関係を改善し発展させながら、自己を律していくことを体得するとともに、相手の立場を理解して行動するようになる。」²⁰とし、文部省『小学校指導書 道徳編』1989 に記載のある「道徳的实践力」²¹を引用して、役割演技のねらいと一致することを主張している。

このように、生田は、道徳の時間における役割演技と自発性・創造性の関係については明らかにしている。しかし、道徳的知識については、小学校の中学年段階ですでに身に付いているとし、判断については、役割演技を通して身に付いていくとしており、どちらについても自発性・創造性の理論に裏付けられた主張とは言えない。

また、道徳的心情については、役割演技による授業実践を通して子どもたちの様子を観察したことからの主張である。そして、道徳的態度については、道徳的行為と捉え、その行為に価値があることを主張するのみで、役割演技と道徳的態度の関係についても道徳的心情と同様に具体的な理論に裏付けられた主張は展開していない。

道徳的实践力に至っては、文部省『小学校指導書 道徳編』1989 を根拠とし、役割演技のねらいと一致することのみを主張し根拠としている。

つまり、これら生田の主張には、自発性・創造性の理論のように裏付けられた根拠はなく、役割演技が道徳的知識・判断、道徳的心情、道徳的態度及び道徳的实践力の育成に効果的であることを説明するには根拠が不十分であると考ええる。

第5章 道徳性の諸様相と役割演技

筆者は、レイモンドの三つの要素を基に、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』に示されている道徳性の諸様相との関係性について検討したところ、道徳科の授業における役割演技は、レイモンドの主張する、「思考、感情、行動の三つの要素が同時に発生するばかりでなく、相互作用の結果、三つの要素がより充実したレベルまで高まり、強調され、押し上げられる」²²ことから、道徳性の育成に資する効果的で体験的な学習につながると考える。

そして、早川が主張する、道徳的諸価値の理解と自分自身の生き方が循環するように

深まり、広がっていくことと、レイモンドの三つの要素（思考、感情、行動）から道徳性の育成と役割演技の関係について、筆者は、【表4】のように考える。

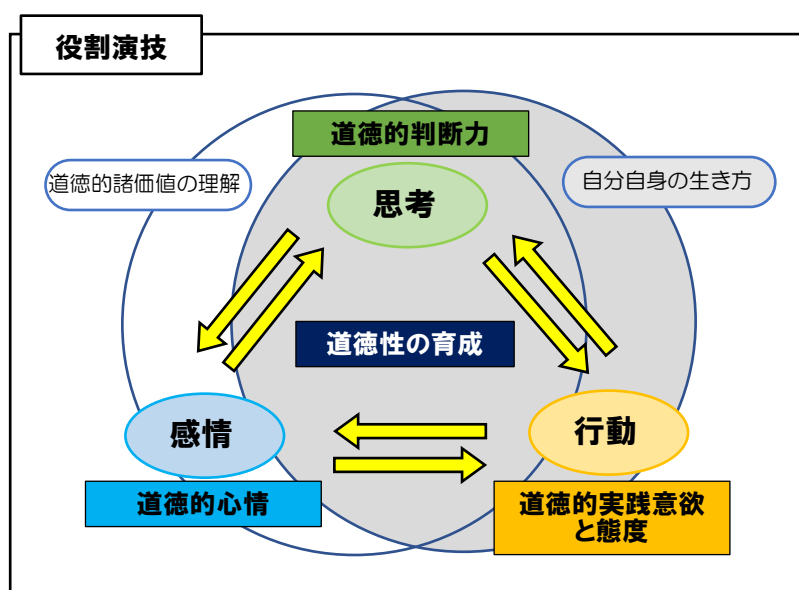
始めに、道徳的判断力については、児童生徒が道徳科の授業において、自身の道徳的価値の見方や考え方に従って、即興的にどのように対処すべきか思考し判断を経ってから役割演技として行っている。

次に、道徳的心情については、児童生徒が道徳科の授業において、自身の善悪の判断を基に、役割演技において、同情、共感、やさしさ、おもいやりなどを即興的に行っている。

最後に、道徳的实践意欲と態度については、児童生徒が道徳科の授業において、道徳的価値を実現しようとする意志が行動を通して役割演技として現れるだけでなく、真実性の理論から心理的にも、現実的な経験となり、道徳的行為への身構えにもつながる。

これらのことから、早川の主張する道徳的価値の理解と自分自身の生き方が往還するように学びが深まり広がりながら、その中身として、レイモンドの主張する三つの要素（思考、感情、行動）が、道徳科の役割演技においても同時性として、道徳性を構成する諸様相として働きながら道徳性の育成へとつながる。

以上考察してきたことから筆者は、道徳科の授業において役割演技を取り入れることが、道徳性の育成に資する体験的な学習であるとともに、道徳性の育成に効果的で優れた指導法の一つであると結論付ける。



【表4】道徳性の育成と役割演技の関係

第6章 研究のまとめ

筆者は、本研究の成果として、早川の主張する道徳的価値の理解と自分自身の生き方が往還するように学びが深まり拡がりながら、その中身として、レイモンドの主張する三つの要素（思考、感情、行動）が、道徳科の役割演技においても同時性として、道徳性を構成する諸様相として働きながら道徳性の育成へとつながることについて主張した。そして、道徳科の授業において役割演技を取り入れることが、道徳性の育成に資する体験的な学習であるとともに、道徳性の育成に効果的で優れた指導法の一つであると結論付けた。

しかしながら、劇化、役割演技、動作化の変遷における年代の役割演技などの授業実践と筆者の主張する【表4】道徳性の育成と役割演技の関係を結び付けるまでには至らなかった。

そこで、今後の展望として、役割演技など疑似体験的な表現活動については、これまで多くの研究者や教員により授業実践が行われていることから、その授業実践と筆者の理論の結び付きについて検証が必要であると考ええる。

註

- ¹ 文部科学省『「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）』2016 6頁
- ² 江橋照雄『役割演技』明治図書出版 1971 1頁
- ³ 江橋照雄『役割演技』明治図書出版 1971 1頁
- ⁴ 江橋照雄『役割演技』明治図書出版 1971 22頁
- ⁵ 文部省『中学校 道徳指導の諸問題』1967 83頁
- ⁶ 江橋照雄著『役割演技』明治図書出版 1971 10頁
- ⁷ 江橋照雄著『役割演技』明治図書出版 1971 10頁
- ⁸ 江橋照雄著『役割演技』明治図書出版 1971 11頁
- ⁹ 江橋照雄著『役割演技』明治図書出版 1971 9頁
- ¹⁰ 生田茂著『役割演技による道徳指導』黎明書房 1973 110頁
- ¹¹ 生田茂著『役割演技による道徳指導』黎明書房 1973 110頁
- ¹² 生田茂著『役割演技による道徳指導』黎明書房 1973 115頁
- ¹³ 生田茂著『役割演技で進める道徳指導』黎明書房 1989 106頁
- ¹⁴ 生田茂著『役割演技による道徳指導』黎明書房 1973 104頁
- ¹⁵ 生田茂著『役割演技による道徳指導』黎明書房 1973 104頁
- ¹⁶ 生田茂著『役割演技による道徳指導』黎明書房 1973 104頁
- ¹⁷ 生田茂著『役割演技による道徳指導』黎明書房 1973 104頁

¹⁸ 生田茂著『役割演技による道徳指導』黎明書房 1973 107 頁

¹⁹ 生田茂著『役割演技による道徳指導』黎明書房 1973 108 頁

²⁰ 生田茂著『役割演技で進める道徳指導』黎明書房 1989 112 頁

²¹ 文部省『小学校指導書 道徳編』1989 35 頁

「ここで言う道徳的実践力というのは、一人ひとりの児童が道徳的諸価値を自己の自覚として主体的に判断し、将来出会うであろう様々な場面、状況においても価値を実現するための最も適切な行為を選択し実践することが可能となる内面的資質を意味しており、道徳的判断力、心情、態度と意欲を包括するものといえよう」

²² レイモンド J. コルシニ著 金子賢監訳『心理療法に生かす ロールプレイング・マニュアル』金子書房 2004 14 頁